

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

和田健先生 追悼号

県下文学史上に貴重な存在

清 永 唯 夫 (前山口県創作懇話会会長)

自らも高齢の身で、敬愛する先輩の訃報に接することは真に切ないものであります。

和田健氏とは、山口と下関という異なる町に住み、生活面での直接的な交流があったわけではありませんが、山口県の文化・文学等の振興に寄せる思いは深く共鳴するところで、昭和58年に発足した山口県創作懇話会、また山口県立大学の郷土文学資料センターの活動については、共にその当初から委員としての名を連ね、それぞれに思いを訴えて来たわけでありました。

ここに“山口県創作懇話会”と言いますのは、山口県の全体から文学作品（創作・随筆等）を募集して、その優秀作による『やまぐち創作文芸』を刊行。山口県の文学的資質を高めて行こうというものでした。

その発足当初の運営委員は、伊藤正一、木岡義靖、清永唯夫、中野真琴、福田百合子、堀江晋、和田健（五十音順）、事務局＝藤井美枝子といった全県にわたっての顔ぶれでした。

そして会としての実績を積み重ねて行くなか、出発時から会長を務めて下さっていた岩国の伊藤正一氏が、平成元年、第八集の刊行直前にお亡くなりになったことで、一番の若手であった私が二代目会長ということになりました。当然のことながら強くご辞退いたしたのですが、皆様方それぞれに多くの役をお持ちになっており、私が長年、下関市立図書館長の職についていたことなどもあって、和田氏などからの強い要請で、結局お受けすることになりました。

その後、平成16年をもって和田氏は運営委員を辞され、私も平成24年に『やまぐち創作文芸』第三十集の刊行をもって運営委員（会長職）を辞したわけですが、その間の平成18年には山口県が第二十一回国民文化祭の引き受け県となり、山口県総合芸術文化祭と改め、“心ときめく文化維新”を提唱したことから、本会も郷土出身の直木賞作家古川薫氏、芥川賞作家高樹のぶ子氏のお二人に審査委員にご参加いただき、国民文化祭としては初めての随筆の全国公募（一般、中・高）を実施し、その成果として『随筆“感動との出会い”』を刊行するなど、他県に勝る成果を取ることが出来たと思います。

以上のような組織的なかわりのほか、いま一つ忘れがたいのが、“燭台”のころ—昭和初期の文芸活動”



▲ 創作懇話会世話人。向かって左端が和田氏。



と題しての、和田健・古川薫・清永唯夫三名による座談会の件であります。

この座談会の対象となった「燭台」というのは、東京で雑誌の編集や文芸批評等で活躍中、大正2年の関東大震災に被災、その翌年、下関で発行されていた「関門日日新聞」の社会部長として招かれて下関の人となった吉田常夏（父親の故郷は山口湯田）を中心に、昭和2年10月創刊、昭和8年10月まで二十四冊を刊行して終止符を打った文芸誌の名称で、西日本総合文芸誌と称したとおり、下関に限らず東京の仕事で知りあった著名な作家や詩人などの作品を掲載、一方で投稿欄を設けて地域の新人に発表の場を提供。

今日広く知られる金子みすゞも同誌に投稿してその歩みを始め、北九州からも未だ無名であった火野葦平も玉井雅夫の筆名で数回投稿するなど、その果たした意義は極めて大きいものであります。

そして、その「燭台」に、和田氏も最年少の十六歳で詩を寄せられ、いわば「燭台」が和田氏の詩人としての出発に大きい役割を果たしたのであります。

この三人による座談会は、平成16年に第二期の「燭台」と称して下関で刊行された文芸誌上十六頁にわたって掲載されたもので、要するに和田氏は、詩人として優れた存在であったと同時に、その数冊の著書にも示されているとおり、山口県の文学史を語る上に誠に尊い存在であったと、改めてその霊に合掌しお礼を申し上げる次第であります。



お世話になりました — 創業者を偲ぶ —

陶 山 祐 二（山口県詩人懇話会代表）

そのうち和田健が
かくれる

後継ぎになることを、1964年に創立された時から山口県詩人懇話会の代表であった和田健さんから頼まれたのは、1995年。能力の無いことを自覚している私は、辞退したかったのに、結局、押しつけられてしまったのだが、その後もいろいろと助けてもらった。他の多くの人々の協力にも支えられながら、昨年には五〇冊目の『現代山口県詩選』を発行するなどの活動を続けている。

だが私と和田健さんとの間には、一致しないことも多かった。たとえば、詩の表記、なかでも送り仮名について。『現代山口県詩選』の編集作業を一緒にする中で、「涙を落す」と書かれた原稿があったら、和田健さんは「涙を落とす」と「と」を入れなければ納得しない。私は、新聞や教科書の表記は統一した方がよいが、詩の場合は作者の好みや考えにまかせるのがよいと言う。表現に一種の普遍性を求める和田健さんと、作者の書いたものを変えるべきではないという私の主張は、根本的には折り合わないまま、最後は年長者に私が譲る形で印刷に回された。これはほんの一例である。

「もともと私個人は詩に対しては、一種の偏食者なので、自分の好みに合わないものには、理解のベルトをゆるめるわけにはいかなかった。

『駱駝』には、私たちの感覚からすると、どこか異質な体臭というものがある。思想的にも対峙するものがある。」

『駱駝』一〇〇号記念号に載せられた「駱駝頌」と題する和田健さんの文章の一部である（1965年。77ページ）。『駱駝』は磯永秀雄さんが主宰し、私も属していて、和田健さんたちとは体質の違う団体の詩誌であった。

この文章は来賓祝辞に当たるものだが、無理に調子を合わせたりしない姿勢が見られ、誠意が伝わる。

和田健さんは、山口県に関係のある文学者の業績を調べ、世に広める仕事をした人だが、名を知られない若い人々の文学活動にも興味を示し、指導して来た。その対象は、自分と共通する人ばかりではない。だが、

自分とは異質のもので「理解のベルト」をゆるめることができなくても、そこに価値や可能性が感じられるならば、積極的にそれを認め、育てようとした。

私が無理やり後継者に選ばれたり、2002年に出された『へその耳』という、質量ともに重みのある詩集の跋文をやはり無理やり書かされたのも同じ理由によるものかもしれないことに、今ごろになって気がついた。

創業者として大きな実績を残す一方、自分の詩を作ることも、長年にわたって続けられた。その原動力の一つは、年齢を重ねても衰えることを知らない好奇心である。身のまわりの自然を愛し、川に遊ぶ鳥を愛し、人間を愛する一生であり、その表現が和田健さんの詩になった。

冒頭にあげたのは、『へその耳』の跋文の中で私が引用し、感想めいたことばを添えた詩の一部である。かくれることなく、厳しさをつつむ温顔で私たちを見守り続けてもらうことを願いながら、全文を書き写す。

かくれる 和田健

ボールペンのキャップが

かくれる

小さな定規が

かくれる

めがねが かくれる

バイクのキイが

かくれる

洗ったはずの箸が

かくれる

人の名前が かくれる

かくれる かくれる

そのうち和田健が

かくれる

和田先生に導かれて

多 田 美千代 (嘉村礒多顕彰会顧問)

嘉村礒多をはじめ郷土文学全般に通じ、親しみやすい語り口で文学愛好の輪を広げられる一方、長年にわたり、毎日新聞「はがき随筆」の選者、及び「やまぐち文芸往来」を担当された和田先生は、沢山の書き手を育てられました。

「やまぐち文芸往来」は毎日新聞社の提案で郷土文学の現況を出版物と人の動静にスポットを当てて記録する目的で始まったもので、昭和五十二年から十九年間、毎月一回のペースで実に二百二十七回に及ぶロングランコラムでした。八十歳を期に退かれたことは、止むを得なかったとしても毎月のコラムを心待ちにしていた者にはとても残念なことでした。私も同人誌「風響樹」に嘉村礒多を書き始め、コラムにとり上げて頂いたのです。

実は礒多については名前を知る程度に過ぎなかった私でしたが和田先生から礒多生家へお誘い頂いたことが礒多に近づくきっかけとなったのです。たぶん五十六回忌に当たる年だったと思います。その日は冬麗

の澄み渡った日で、仁保川を遡るタクシーの窓から眺める山々は冬紅葉に染まり、旅心地の道すがら先生は「磯多が亡くなったのは私が十七の時でした。あまりにも早過ぎた死に驚いて、必死に自転車を漕いで生家へ急いだものです」と振り返っておられました。山口市内から二十キロはありそうな道は今ほど平坦ではなかった筈ですから余程の思いだったにちがいありません。当時先生は小学校高等科卒業と同時に県立山口図書館（現県立図書館の前身）にお勤めだった筈です。沢山の本に接することが出来た幸せを常々お聞きしていましたので郷土文学についてもその頃の勉強がもとになっていたにちがいありません。わけても嘉村磯多については関心が大きかったのだと思います。

命日の集いは主に地元の短歌会の方々数名とのささやかなものでしたが、磯多の妹のイクヲさんのお茶のおもてなしに与り、磯多が生まれ育ったままの家で聞く和田先生のお話には次第に身近に思われてくるようでした。

その二日後のこと、まさかと思っていた白水社刊の『嘉村磯多全集』全三巻を山口市内のK書房から手に入れることができたのです。こうした思わぬ縁に恵まれて作品を読む傍らゆかりの場所や人物を探訪する中で磯多は更に身近かになってくるのでした。

写真やそのほかの資料もかなり集まった頃、当時の毎日新聞山口支局長白石貞次郎氏より和田先生へ「嘉村磯多展」の申し出があり、私の手もとの資料も役立てて頂くことになりました。会場は「CS 赤レンガ」。顕彰会も後援会も無い時でしたので俄か作りの「嘉村磯多展実行委員会」が立ち上げられ、会長—山口市長佐内正治 後援—山口市教育委員会・テレビ山口・山口放送・NHK山口放送局・毎日新聞社 協力—山口女子大学附属郷土文学資料センター他。事は速やかに運び、主賓に磯多の妹イクヲさんをお招きしてテープカット。六日間の磯多展の幕開けとなりました。

▲「山口が生んだ文豪・生誕九十五周年記念—嘉村磯多展」(平成4年11月28日～12月4日)

ポスターは支局長の意気込みを示すもので、和田先生も大いにご満悦でした。結果は予想以上の入場者を得て一週間の「嘉村磯多展」はめでたく終了しました。

続いて平成六年五月よりサンデー山口では「ふるさと文学再発見—異色の作家嘉村磯多」のタイトルで連載開始。依頼を受けて平成九年八月まで41回寄稿しました。

このようなことから磯多の地元ではめざましい動きを開始。

地元の主催による「嘉村磯多生誕百年記念事業実行委員会」が立ち上げられ、山口県文化振興財団・山口市よりの助成を受け多彩な行事を展開。

▲「嘉村磯多生誕百年祭」(平成9年10月12日～26日)

○嘉村磯多展 CS 赤レンガ (10月12日～26日)

○短文芸大会 大富公民館 (10月12日)

○生誕祭 大富公民館 (10月18日)

○記念講演会 CS 赤レンガ (10月18日)

○市内文学散歩 (10月25日)

最終日の文学散歩は山頭火・中也も組み込まれた和田先生の名ガイドで百年祭の実りある締め括りとなりました。

こうした経緯はやがて顕彰会発足に発展。

▲「嘉村磯多顕彰会」発足 (平成11年11月27日)

和田先生は顕彰会設立に尽力、当初より顧問。会長に就任された兼村晴定氏は早速老朽化も限界に達した嘉村家の保存運動開始。一万一千四百名もの署名をもって山口市に陳情。

▲「嘉村磯多生家」—農村体験施設「帰郷庵」としてオープン。(平成22年11月27日)

ここに至るまで陰に陽に和田先生の磯多への熱い思いに導かれてきたことを忘れることはできません。

オープニングに先立ち有志と共に甦った生家へ和田先生ご夫妻をご案内しました。先生のお喜びの顔がきのうのこのように思いだされます。

付記

嘉村礒多顕彰にかかわる点については筆者が直接知る範囲のことを述べてみた次第ですがそれ以前に関しては和田先生の記録をここに示しておきたいと思います。

- (1)二十五回忌（昭和 32 年 11 月 30 日）
 - 文学碑除幕（常栄寺楼門前）
 - 記念講演会（白石小学校講堂・11 月 29 日）
- (2)三十回忌（昭和 37 年 11 月 27 日～12 月 2 日）
 - 嘉村礒多追憶展（県立山口博物館・11月27 日～12月2 日）
 - 文学座談会（真証寺・11 月 28 日）
 - 追悼法要・懇談会（常栄寺・11 月 30 日）
- (3)三十三回忌 常栄寺（昭和 40 年 11 月 30 日）
 - 新版『嘉村礒多全集』出版報告
- (4)五十回忌（昭和 57 年 10 月 16 日～11 月 23 日）
 - 文学碑除幕（礒多母校大富小学校跡・10 月 16 日）
 - 記念講演会（山口市民会館小ホール・11 月 14 日）
 - 礒多著作・遺品展（仁保公民館・11 月 21 日～23 日）
 - 市内文学散歩（11 月 21 日）

いずれも和田先生が深く係わられて後へと発展したものに違いありません。



▲ 嘉村礒多生誕 95 年展・和田先生と。

詩人和田健先生を悼む

田 村 悌 夫（当センター協力員）

昨年 11 月 24 日、和田先生がお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。

私は長年和田先生に指導をうけ今日を迎えましたので、その生い立ちや業績とともに先生との思い出を振り返り、今は亡き先生を偲びたいと思います。

詩人和田健は大正 4 年 1 月 10 日、福岡県門司市（現北九州市門司区）で生まれたが、生前の話では宇部市小野が和田家のルーツと云われていた。和田家は明治まで小野の庄屋で造り酒屋であったが、明治維新後家族構成が女ばかりとなり廃業した。そのため両親は縁故を頼って門司に渡り、小野の跡地は一時期分教場となるが現在は児童公園となり、名残りの井戸が残っている。大正 10 年、門司から祖母の住む本籍地山口町（昭和 4 年市制）に帰り、今道尋常高等小学校（現白石小）へ入学。昭和 4 年、同校高等科卒業後、中河原の現赤レンガの所にあった県立山口図書館に奉職。その傍ら夜間中学に通うも主として



▲ 平成 19 年山口市内 喫茶ナカノにて 先生と私。

独学を貫く。図書館長は厨川千江という県知事と同格の給料取りの俳人で、和田青年に「勉強しなさい」と毎月文芸誌を買って渡してくれた。これにより文学の道に目覚めていった。

昭和6年、下関から吉田常夏が出していた総合文化誌『燭台』に詩をはじめて投稿し、詩人としての第一歩を踏み出す。昭和13年9月、山口市内の詩の愛好者たちと『詩園』を創刊。この詩のグループの中に中原中也の弟呉郎（当時長崎医専生）が居て、若き詩人たちは彼の母フクさんの住む中原邸を根城に湯田の街を闊歩した。この年11月28日、漂泊の俳人山頭火が小郡の其中庵から引っ越してきて、このグループに合流。

山頭火の湯田での生活は彼の日記に委しく書かれており、若き日の和田健の名前もその中に登場する。

昭和14年3月頃結婚し、当時地元新聞の記者をしていたが、戦時中は市内の中央を流れる一の坂川沿いにあった市の洗濯授産場で夫人と共に働く。そこへ山頭火がよく訪ねてきて、短冊「分け入れば水音」を書いた。

昭和17年、山口市役所に勤務。以後退職まで福祉、社会教育関係のポストを歴任し、最後は総務部長で退職。これが先生の略年譜である。

次に和田先生の文学的業績について、振り返ってみる。先生はかつて私に、「私は役所に勤めていたので、文学でも一党一派に属せず、全体のまとめ役になりたい」と話された。成程、先生の業績を見るとその通りになっている。先生の業績の第一は山口県詩人懇話会を昭和13年に発足させ、以後今日まで毎年『現代山口県詩選』が刊行されていることである。これは先生でなければ出来なかった画期的な功績であると私は確信している。

第二は『防長文学散歩』（昭和49年10月）の執筆である。これは県内の五百十余名に及ぶ文学者が列記され、郷土の文学者とその周辺の風景が詩人和田健の愛情と追慕の思いにより写真入りで克明に描写され、今や山口県文学案内のよきバイブルとなっている。

第三は山頭火との交流及顕彰である。これは『山頭火よもやま話』（平成13年3月）として発表。山頭火研究の必読書であることは勿論であるが、私は特に本書の校正を命ぜられ、跋文を書かせてもらった。以上の三点を私は詩人和田健の主要な業績としてリストアップしたい。

先生の文学歴は既述の『燭台』がスタートであるが、昭和14年に詩人丸山薫の紹介により「四季」の会員となり、丸山門下だと自称しておられた。先生の詩の特質は年少時の貧苦の体験を底流とする逆境克服の生活詩と思われ、「詠花吟月」の詩ではない。故郷小野小・中学校など多くの校歌や町歌の作詞にその成果が結実されているように感じている。

また、先生は県内の文人の中では本人や家族との接触があったためか、種田山頭火の外には氏原大作、嘉村礒多、中本たか子らが好きで、中原中也は詩人としては好きだが、詩は難解だと語っておられた。その他久保白船（平生）や丸岡忠雄（室積）の石碑除幕式や詩のボクシングにお伴したこと等々思い出はつきない。

山口県郷土文学界の重鎮であった。

先生、大変お世話になりました。どうか安らかに眠りください。 合掌



追悼 和田健先生

福田 百合子（山口県立大学 名誉教授）

先生は詩人としての厳しさや、寂しさを、なるべく表面に出さないように気を使って接して下さっていたのだと、今になって改めて強く胸に受けとめています。いつも優しく面倒見のよい先輩格として、色々な場面でご一緒していただきました。そのすべてが私の中に人生の、また文学への指針として生きています。

昭和19年頃の山口。戦時中の疎開で、ピアノの宮崎清先生宅へ妹の智恵先生が滞在され、文学のグループ

が集いました。そして「オレンジ歌会」発足。まだ学生の私を市内道場門前「金龍館」隣の「日本基督教会」（坂本邸）での歌会に誘って下さったものです。これがきっかけとなって、吉田常夏や吉田緒佐夢（中也等との合同歌集「末里野」の編者）のご遺族への接点に繋がりました。

終戦後は、いち早く豎小路法界寺本堂での座談会。岡不可止・氏原大作も出席。佐藤春夫・千代子夫人の来山歌会。黒髪島歌碑除幕への同伴など忘れられません。文学史上の人物と共に…の感慨ひとしおの思いです。

雑誌「詩園」の一部を、風呂敷に嵩張る程持参されたことがあります。中也遺稿の掲載や、弟呉郎の消息、山頭火との交流逸話。中原家との親交は、後に寄贈された一枚の写真に、若き日の先生、中也の母フク、孝子夫人、山頭火と並んでの撮影にうかがうことができます。中也の文圃堂「山羊の歌」を入手、大切にしていたのに手許不如意の為、古書店第三書房へ売却した口惜しさを聞き、「残念々々」と繰返したのも懐しい限りです。



▲「茶の間随筆」出版祝賀会。平成10年10月。

中也詩碑の建設にも熱心でした。除幕式には小林秀雄・大岡昇平・河上徹太郎・今日出海来山。式後、湯田温泉「水野旅館」へ訪ね詩集にサインを貰ったのも、和田先生のお計いでした。除幕式といえば嘉村磯多文学碑の際も、全ての進行をなさいました。女子短大助手の私は学生と参列。卒業論文に磯多を選んだ一人が、作品「経机」を朗読。新全集を佛前への奉呈役に、私を指名して下さいました。河上徹太郎・大平和登・太田静一先生などの顔ぶれが浮かんできます。五重塔前の牧水歌碑の時も和田先生とご一緒でした。短大生のコーラスが新緑の裏山に響いて、さわやかな風が吹き抜けました。

中本たか子と田島準子の若い日のこともよくご存知で、資料も沢山お持ちでした。角島に中本たか子の姪御さんを訪れ、浜木綿の種や、根分けを貰ったりしたものです。

文学への強い愛着と、広い人脈や資料の集積を大切に、また広く利活用する為にと文学館設立に熱意をそゝがれ、陳情を繰り返されました。なかなか実現には至りませんが、現在の郷土文学資料センターや、県立図書館内の文学ギャラリーの開設、第一期文学年表作製などは、その経過に於ての、貴重な稔りではないでしょうか。

宮野公民館での読書会、毎日新聞のコラム「はがき随筆」選者としては、最も長いお付き合いとなりました。発足当初からの参加で半世紀に及ぶものです。一つのことに息長くとずさわることの難しさ、楽しさ、意義をつぶさに学んだと思います。読書会の小旅行にはお得意のカメラを持参され、腕前を發揮なさいました。「はがき随筆・随友歌」を作詞、合唱されたのも、本来のリズム感の良さで、多くの小学校々歌の作詞とも繋がるのでしょうか。知事や市長の祝辞類の代筆も多かったと、うかがいました。独得の書体が目の前に浮かびます。独学の筆法です。

一の坂川沿い、田村幸志郎邸前の山頭火句碑

おいとまして
葉ざくらの
かげがながく
すずしく

山頭火

は、先生の最晩年の筆跡と撰文が残されました。日赤病院のシーツ類を一の坂川で洗濯し続けた若かりし日々を語られた、その川のほとりに青春を刻んで去られたのかと、桜に、蛍にと思ひ出は広がります。先生、本当に有難うございました。これからも、どうぞ見守って下さいませ。安らかなお眠りを念願致します。

平成26年度の山口県立大学サテライトカレッジ「やまぐちの文学再発見」は、以下のプログラムで開催予定です。

会場：柳井市文化福祉会館 時間：10：00～11：30 受講料 1,500円

回数	日 時	テ ー マ お よ び 講 座 内 容	講 師
1	6.28(土)	瀬戸内の文化 ―文学を中心に―	山口県立大学名誉教授 福田百合子
2	7. 5(土)	国木田独歩の短篇小説を読む	当センター研究員 加藤 禎行
3	7.12(土)	江戸時代の小説に描かれた大内氏	当センター研究員 木越 俊介
4	7.26(土)	『平家物語』入門	当センター所長 稲田 秀雄

寄贈図書 (2013年11月～2014年6月)

河村正浩『句集 秋物語』・中原中也記念館『中原中也記念館公式ガイドブック『中原中也の世界』』・徳地短歌会『あすなる 第二集』・鈴木千登世『向きあふ椅子』

寄贈雑誌 (2013年11月～2014年6月)

『其桃』第828～834号(其桃発行所)・『文芸山口』第312～315号(山口文芸懇話会)・『あらつち』第690～692号(あらつち社)・『山彦』第119～121号(山彦発行所)・『ふるさと紀行』第136、137号(ふるさと紀行編集部)・『地橙孫新聞』第11号(兼崎地橙孫顕彰会)・『颯』第95号(颯事務局)・『和海藻』第29号(豊北郷土文化友の会)・『シュリンプ』西村謙追悼号(西村直記)・『中原中也記念館館報』第19号(中原中也記念館)・『風響樹』vol.44(風響樹同人)・『小宇宙 山口県支部報』第3、4号(コスモス短歌会山口県支部)・『佐波の里』第42号(防府史談会会誌)・『嘉村磯多顕彰会だより』第6号(嘉村磯多顕彰会)

編集後期

▼センターだより23号をお届けします。▼今号は、昨年11月24日に御逝去された和田健先生の追悼号をお送りいたします。▼和田先生の存在の大きさは、御生前から常に感じておりましたが、お亡くなりになってその思いが強まるばかりです。▼まずは、和田先生とともに山口の文学活動を牽引されてきた清永唯夫氏に御寄稿いただきました。同志として歩みをとともにされた氏ならではの深い思いが伝わって参ります。▼さらに、山口県創作懇話会での思い出を陶山祐二氏に綴っていただきました。先生の厳しいお姿が目には浮かぶと同時に、引用された詩の深さがいまこそ胸にしみます。▼多田美千代氏の追悼文からは、磯多との出会いが和田先生によることなど、御生前、色々な「場」を築かれていた先生への敬意がひしひしと伝わります。▼田村悌夫氏からは、和田先生への深い敬意が記される、とてもまっすぐな哀悼の念をお寄せくださいました。▼福田百合子先生には、まさにとともに文学の士として多くの時間をともにされたお立場から、たくさんの思い出を寄せていただきました。▼当センターとしましては、和田先生には設立当初から運営協議会委員としてご協力いただき、さらに近年では、『センターだより』15・18号に御寄稿くださり、本当に多くのことを教えていただきました。もっとお教えいただきたいこと、お聞きしたいことはたくさんあったのですが、それは御関係のみなさまも同じ思いでいらっしゃるかと存じます。▼当センター研究員一同、改めて、ご冥福をお祈り申し上げます。先生ありがとうございました。(K)



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜島3-2-1)
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2014(平成26)年6月30日